

知恵のおわり、知恵のはじまり

越 川 弘 英

奨励者紹介[こしかわ・ひろひで]

同志社大学キリスト教文化センター教授

[研究テーマ]キリスト教の実践神学(礼拝、宣教、牧会)

イスラエルの王、ダビデの子、ソロモンの箴言。

これは知恵と諭しをわきまえ
分別ある言葉を理解するため
諭しを受け入れて
正義と裁きと公平に目覚めるため。
未熟な者に熟慮を教え
若者に知識と慎重さを与えるため。
これに聞き従えば、賢人もなお説得力を加え
聡明な人も指導力を増すであろう。
また、格言、寓話
賢人らの言葉と謎を理解するため。

主を畏れることは知恵の初め。
無知な者は知恵をも諭しをも侮る。

(箴言 1章1―7節)

知恵を獲得するならば

聖書の中には「知恵文学」と呼ばれる文章や文献が含まれています。いちばんよく知られているのは、旧約聖書の中の箴言、コヘレトの言葉、ヨブ記といったものですが、それ以外の文書の中にも「知恵文学」的な思想はいろいろなところに含まれています。

この「知恵」はヘブライ語で「ホクマー」といいますが、これはありとあらゆる知恵や知識を含んでいて、学校で学ぶ学問や研究における知恵・知識、それぞれの仕事や技術、生活一般に関わる実用的な知恵・知識に至るまで、さまざまなものを含んでいます。

今日読んだ、箴言の冒頭では、こうしたさまざまな知恵・知識を獲得することができれば、私たちの人生は健全で確かなものとなると語っています。1章4節には、「(知恵を得ることは)未熟な者に熟慮を教え／若者に知識と慎重さを与える」と記されています。

さて、この秋学期、私は9コマの講義を担当しています。先日、京田辺キャンパスのある教室で、教卓の

下のところに別の講義のレジュメとおぼしきプリントが残っているのを見つけました。自然科学系の講義で、私にはまったく分からない難しい数式や記号が出てきて、何やらの定理を証明するための授業であったようです。私はしばらくそれを眺めていて、いくつかのことを思いました。

第1に、「分からん」。

第2に、「これは私に関係ない」。

第3に、前にいる学生たちを見て、「この学生たちはこの数式が分かるんだろうなあ。すごいなあ。えらいなあ」という感想です。

そんなことがあって、その後、しばらく講義に行く教室などで、同じようなレジュメやプリントはないものかと探したのですが、時々、出会うそうしたプリントなどを見ていると、さすがに文系の資料はある程度分かりますが、自慢ではないけれども、理系はほとんどまったく分かりません。

しかし分からないながらも分かったことは、大学というところは実に膨大な知恵・知識を教えているところ・学んでいるところなんだなあという、当たり前のことの実感でした。それに引き換え、学生と教員合わせて30年近くこの同志社に籍を置いていながら、自分が学んだことのいかにわずかであったことが……という今さらながらの実感もありました。

皆さんは大学図書館の閉架書庫に入ったことはありますか。私は学生時代に初めて地下の書庫に入ったとき、そのあまりにも膨大な本の数に感動に近い驚きをもったことをはっきり覚えています。最近のラーニング・コモンズもまあいいのですが、もしまだであれば、皆さんが一度は閉架書庫に入って、しばらく歩き回ってみることをお勧めします。けしてオーバーではなく、そこには人類がこれまでの歴史の中で積み重ねてきた知的活動の重みや厚みが目に見えるかたちで横たわっているのです。

「知恵」と「智慧」

知恵や知識が大切だということは言うまでもありません。それらを学ぶことが私たちの生活を豊かにし、人生を豊かなものとするというのは、たしかにその通りだと思います。

しかしながら、ここで忘れてはならないことは、知恵には少なくとも2種類のものがあるということです。私が学生時代、神学部で仏教学を教えてくださった先生は、それを黒板に「知恵」と「智慧」と書いておられました。「知恵」は言わば一般的な知恵・知識であり、「智慧」は仏教における悟りの知恵ということだったと思います。専門でもないことを偉そうに話すのは気が引けるのですが、この「悟りの知恵」とは「般若」とも呼ばれる知恵のことで、仏教における真理についての知恵を意味しているようです。

つまり、一方には一般的な知恵・知識があり、他方には宗教的な真理についての知恵があるということです。そしてこの二つのものは無関係ではなく、真理についての知恵のもとに一般的な知恵が位置づけられるという関係のもとにあります。

今申し上げたのは仏教の用語についてですが、実はこれと同じようなことがもっと一般的なかたちで言えるのではないかと思います。分かりやすく言えば、知恵のひとつは一般的な知恵、学問・研究から始まって仕事や日常生活一般に関する知恵、実用的な知恵、技術的な知恵のことです。もうひとつの知恵は、こうした一般的な知恵をどのように使うべきかということに関わる、より上位の知恵というか、根本的な知恵というか、ある一定のものの見方や価値観といった私たちの人格の核となる部分に結びつく知恵のこ

とです。

こういった上位の知恵というか根本的な知恵というものに取り組んできたのが、宗教とか哲学という分野の学問だったと言えるでしょう。だからといって、神学部や文学部の人、他の学部学科の人よりも偉いとか、上位の知恵・根本的な知恵を身につけているとは限りませんが、そうした知恵の問題に取り組みやすい条件や環境のもとにあることは事実だろうと思います。

人間は材料ではない

近年、文部科学省（以下、文科省）は文系の学問に対して、ずいぶん冷たい態度を取っています。極端に言えば、「必要ない」と言わんばかりの雰囲気があることは、皆さんもお聞きになったことがあるかもしれません。必要なのは、社会科学や理工系の学問であり、現代社会で実用性の高い学問を優先するのだ、文系はその中には含まれない、ということのようです。

さらに直近の文科省の要請では、実社会でいろいろな業績を上げている人たちを大学教員として雇い授業を担当させなさい、ということを行っています。たとえば、メーカーで働いて特許を取ったような人、薬剤師、弁護士、警察官、学芸員、ファイナンシャル・プランナー、証券会社や銀行の社員、報道現場経験者、臨床心理士などなど、いろいろな職種の経験者から、そのノウハウやスキルを学べというのです。たしかにいろいろな方たちから学ぶことは大切だとも思います。しかし、こういったことはすでに同志社大学でも一定程度実践していることでもあります。文科省は大学を職業専門学校に変えたいのでしょうか（専門学校を悪く言うつもりはありません。両者は別々の目的をもっているはずです）。

皆さんもご承知のように、文科省に限らず、大半の政治家や財界人は人間をつかまえて「人材」と呼ぶことがお好みのようです。今ちょうど国会で審議されている外国人労働者の受け入れを拡大する入管法の改正問題をめぐっても、しばしば「外国人材」という言葉が使われているのを耳にします。マスコミも何の批判もなくこの言葉を使っています。「外国人材」という言葉があるなら、そのうち日本人の労働者は「国産人材」とか言うようになるのでしょうか。

私の偏見かもしれませんが、文科省という役所、また日本の政治家や財界人などを見ると、人間を人間として見ていない、「材料」あるいは「資源」としか思っていないんじゃないかと感じるものがしばしばあります。「材料」や「資源」であれば、加工して、付加価値を付けて、より効率的で生産性の高いモノとして、市場に送り出せばいいということになります。「材料」や「資源」が、「私は何ものか」とか「私はどのように生きるべきか」などと考える必要はありません。むしろそんなことを考えられたら困ることでしょう。

新島襄は「人物を育てる」と言いましたが「人材を生産する」とは言いませんでした。人間は材料ではありません。文系の学問は必要ない、「実用性」のある学問を優先する、実務経験や現場経験のある教員を活用せよ……。私はそういう考え方や要請の背後に何があるのか、疑問をもたざるをえないのです。

オウム真理教と知恵

話が少し変わりますが、私は牧師やキリスト教徒を読者とする『Ministry』という雑誌の編集主幹をやっております。最新号の特集で「オウム真理教」の問題を取り上げました。つい最近、オウム真理教の指導者たちの大量処刑が行われたことは皆さんもご存知だと思います。

ここにおられる皆さんの多くにとって、1995年に起こった地下鉄サリン事件などの出来事は歴史の中の出来事かもしれません。しかし被害者の方々は今も苦しんでおられます。

あの異常な事件を引き起こしたオウム真理教の信徒たちの中には、きわめて高い学歴をもち、科学技術に精通していた人々もたくさんいました。多くの知恵を身につけていた人々です。しかしそうした高度な知恵が、あのような事件を引き起こしたのです。信徒たちの中には、マインドコントロールによる人格操作やさまざまな圧力によって、そのように仕向けられた人々もいたようですが、結果的に言えば、高度な科学技術、実用的な知恵をどのように使うべきか、あるいは使うべきでないかという、より高度の「智慧」を身につけていなかったということになります。

私たちが学ぶ一般的な知恵は崇高な目的のためにも用いられますが、邪悪な目的や醜悪な目的のための手段にもなるのです。人間の歴史とは、ある意味で、そのような知恵の間違った使い方をありとあらゆるかたちで展示する博物館のようなものとも言えるかもしれません。

今から500年前に宗教改革者マルティン・ルターは、「神を教えない教育は賢い悪魔を生み出すだけだ」と語りました。「賢い悪魔」はどの時代にも生産されてきたし、今も生産され続けています。

知恵のおわり、知恵のはじまり

さて聖書に戻しましょう。箴言は「主を畏れることは知恵の初め」と語ります。この言葉に関連して、旧約聖書学者の左近淑(さこんきよし)さんは次のように記しておられます。

「法則性を認識する知恵があっても、法則どおりには行かない。むしろ知恵において法則を認識すれば、同じ知恵によって法則を打ち壊す要素も認識される」。「最善を尽くしてなお、偶然性に出会う。うまく行かない。すべてのものが崩れる瞬間を味わう。(中略)知恵の限界を知恵自身が認識する。そして、この極限の認識において、神を知る。知恵の尽くされたところで神と出会うのです」(『旧約聖書緒論講義』374～375頁)。

「知恵の限界を知恵自身が認識する」というのは名言だと思います。換言すれば、それは「人間の営みの限界を人間自身が認識する」とことと言えるかもしれません。

左近さんによれば、私たちが学ぶ一般的な知恵は、突き詰めていけばその知恵の限界に達する、そこで初めて、より上位の知恵、根本的な知恵を求めることが起こるのだということでしょう。それゆえに「人間の知恵のおわり」は「神を畏れること」につながっていくのです。そしてまた「神を畏れること」は「知恵のはじまり」でもあります。

何が善であり、何が悪であるか。為すべきことと為すべからざることは何か。君はどのように生きるか。私たちはどのように生きるべきか。人間とは何ものか。真理とは何か。

こうした上位の知恵、根本的な知恵に基づいて、私たちが学んださまざまな知恵・知識を正しく用いていくならば、その知恵・知識はほんとうの意味で実りあるものとなることでしょう。

こういったことを問い、これに答える知恵。それが仏教で言えば般若であり、キリストで言えば神に出会うことから与えられる知恵なのだ、ということなのでしょう。

私自身はキリスト教徒であり、40年にわたってこの宗教によって育まれてきました。私が自分の経験から皆さんにお勧めするのは、またお勧めできるのは、第一にキリスト教であり、皆さんにもこの神と出会い、

「神を畏れること」を知ってほしいと思います。

しかしまた、人によっては仏教やその他の宗教を通して、あなたの一生を基礎づけるような知恵に出会うことがあるかもしれません。あるいはまた哲学だったり、その他の学びを通して、人生におけるもっとも重要な知恵に出会うことかもしれません。

今学期のチャペル・アワーの統一テーマは、「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ」（コヘレトの言葉12章1節）ですが、若い皆さんが生きている今、この時期にこそ、そうしたほんとうに重要な知恵に出会い、その知恵を身につけていかれることをお祈りしたいと思います。

2018年11月14日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録